様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年６月５日現在

研究種目：若手研究(スタートアップ)
研究期間：2007～2008
課題番号：19820043
研究課題名（和文）植民地期・解放後における朝鮮の左派知識人の現実認識と「転向」

研究課題名（英文）Socialist’s conversion in colonial/postcolonial Korea

研究代表者
洪 宗郁(HONG JONG-WOOK)
同志社大学・言語文化研究センター・専任講師
研究者番号：80454487

研究成果の概要：

脱植民地の課題は、民族という近代的主体を立てようとする点で、極めて近代的な企図でありながらも、同時に宗主国-植民地の秩序からなる近代社会そのものに対する挑戦である点で、脱近代の契機を内包している。植民地朝鮮の知識人が辿った思想の軌跡は、脱植民地の課題にこだわり続けたという点で、日本知識人の近代批判の不徹底さに対する告発でもあった。朝鮮の「転向」は、植民地近代および総力戦体制が持つある種の合理性を極限まで推し進めることで、潜在していた近代秩序の矛盾を露呈する役目を果たしたと言える。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,320,000	0	1,320,000
2008 年度	1,350,000	405,000	1,755,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,670,000	405,000	3,075,000

研究分野：朝鮮近代史
科研費の分科・細目：東洋史
キーワード：韓国、朝鮮、植民地、社会主義、ナショナリズム、転向

１．研究開始当初の背景

植民地からの解放をはさんだ朝鮮半島の近現代史を振り返る際、情勢の変化およびそれと連動する政治・思想の展開を中心に、3 つの時期を想定することができる。1930 年代半ば、日中戦争勃発後の戦時期、そして解放後がそれであり、戦争と解放がそれぞれ節目を成している。1930 年代半ばは、民族解放運動の熱気が未だ残っているなかで、さまざまな模索が行われていた時期として、そして解放後は、民族国家を建設しようとするエ

ネルギーが一挙に噴出するなかで、その方向をめぐって熾烈な角逐が繰り広げられていた時期として評価される。そして、韓国・朝鮮の政治あるいは思想の流れを説明するうえでは、戦時期を跳び越えてこの 2 つの時期をつないで理解する方式が、一般的に取られてきた。その間に挟まれている戦時期については、国外の民族解放運動に歴史の「正統性」が求められる一方、植民地朝鮮内における知識人の動き―主に体制協力あるいは体制容認の態度―は、歴史からの逸脱と見なす傾向が強かった。

思想あるいは知識人のあり方に焦点をあてて考えるなら、植民地朝鮮の戦時期を表すキーワードは「転向」であろう。植民地下における社会主義者たちの、戦時期に「東亜新秩序」あるいは「大東亜共栄圏」の可能性に賭け、また解放後に民族国家の建設に参加するという、一見矛盾と逆説に満ちた足跡は、われわれに戦争と解放を貫く「知」の流れを読み取るように迫っている。「転向」とは、思想および運動の断絶であったが、また同時に連続の側面も存在した。本稿では、日本思想史研究が作り上げてきた「転向」の概念を植民地帝国の次元で再検討し、また植民地朝鮮の戦時期をみる諸視角との関係の中で吟味する。そしてそれを通して、戦時期の思想的な脈絡を明らかし、1930 年代半ばから戦時期を経て解放後へつながる朝鮮半島の近現代思想史の再構成を試みた。

２．研究の目的

本研究は、植民地期・解放後における朝鮮の左派知識人の思想の軌跡を、とくに戦時期における「転向」に焦点をあてて分析し、植民地期の朝鮮人の実践の解釈をめぐる「反日」/「親日」という二項対立の構図をのり越えて、その中から植民地・周辺部における知識人の主体形成の企てを読み取ることによって、朝鮮半島の近現代の思想史の流れを復元し、さらに、近現代史研究の主要なテーマとして近年注目されている帝国研究・植民地研究の深化に寄与することを目的とした。

３．研究の方法

戦時期に朝鮮で出版された朝鮮語および日本語の新聞・雑誌を分析し、「転向者」たちの「転向」論を検討した。韓国の場合、知識人の著作集などがほとんど整理されておらず、「転向者」についても、体系的な検討のための史料の整理が充分ではない状況である。したがって、個別の「転向者」の事例研究を行う上で、散逸している史料の収集と分析を並行せざるを得なかった。「転向者」たちが残した少なからぬ論説が、まだ、研究に活用されうる状態に整理されていないのが現状であり、その収集・整理が進んだら、「転向」研究の方向そのものが変わることも考えられる。

最近、韓国の歴史・文学の研究者を中心に、戦時期についての関心が高まるにつれて、各図書館・資料館の戦時期の新聞・雑誌の所蔵状況が整理され、また復刻も本格化している状況である。韓国の研究者との交流を通して、新しく発掘・整理された史料の情報を収集することに努めた。

４．研究成果

(1)平成 19 年度

植民地朝鮮における転向の実態を把握するために、朝鮮知識人の動向を中心に調査と研究を行った。

京都帝国大学出身のマルクス経済学者として戦時期に経済新体制および広域経済を

支持する立場をとった朴克采・尹行重の経済論を分析した論文(「解放前後における経済統制論の展開―朴克采・尹行重―を中心に」)を執筆し、韓国の学術誌に掲載した。また、転向をキーワードにして解放前後における朝鮮知識人の思想および実践を分析した博士論文(「植民地後期・解放後における朝鮮社会主義者の現実認識と「転向」)を執筆し、東京大学大学院人文社会系研究科に提出した。

戦時期における朝鮮総督府の経済政策と転向左派の経済論との関係を分析した内容を、日本植民地研究会第 15 回全国研究大会で「戦時期朝鮮における転向左派の経済論」という題目で報告した。1930 年代にアジア停滞性論に立脚した朝鮮史研究を行った李清源の戦時期および解放後の活動を分析した内容を、朝鮮史研究会関西部会例会で 「解放前後におけるアジア社会論の展開―李清源を中心に―」という題目で報告した。

(2)平成 20 年度

これまで行ってきた植民地朝鮮の転向についての研究を、日本の朝鮮史・思想史研究のなかに正当に位置づけるために努力した。また韓国の研究者との交流も行った。まず、「帝国と思想」研究会で報告した「書評:趙寛子『植民地朝鮮/帝国日本の文化連環――ナショナリズムと反復する植民地主義』(有志舎、2007 年)」を整理して『社会科学』(同志社大学人文科学研究所)に発表した。そして朝鮮史研究会で報告した「書評:朴枝香・金哲・金一榮・李榮薫『解放前後史の再認識』」を整理して『言語文化』(同志社大学言語文化学会)に発表した。そして韓国政府の親日反民族行為真相究明委員会が開催したシンポジウムに出席し、「1930 年代ハングル新聞の国際情勢認識――社会主義および全体主義関連記事を中心に」について報告した。以上の研究を通して、最近朝鮮半島の植民地経験をめぐって提起されている歴史修正主義の流れを牽制すると同時に、民族主義に基づいた韓国の「親日」研究と転向研究との疎通の可能性を模索した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３件）

①洪宗郁、書評：朴枝香・金哲・金一榮・李榮薫『解放前後史の再認識』、言語文化、11 巻 3 号、439-471 頁、2009 年、査読無

http://elib.doshisha.ac.jp

②洪宗郁、書評：趙寛子『植民地朝鮮/帝国日本の文化連環―ナショナリズムと反復する植民地主義―』(有志舎、2007 年)、社会科学、81 号、59-68 頁、2008 年、査読無

http://elib.doshisha.ac.jp

③洪宗郁、해방을 전후한 경제통제론의 전개―박극채・윤행중을 중심으로―〔解放前後における経済統制論の展開―朴克采・尹行重を中心に―〕、역사와 현실〔歴史と現実〕、64 号、299-338 頁、2007 年、査読有

〔学会発表〕（計　３件）

①洪宗郁、1930 년대 한글 신문의 국제정세 인식――사회주의 및 전체주의 관련 기사를 중심으로〔1930 年代ハングル新聞の国際情勢認識――社会主義および全体主義関連記事を中心に〕、친일반민족행위진상규명위원회

2008 년도 제 1 차 학술대회〔親日反民族行為真相究明委員会 2008 年度第 1 次学術大会〕、2008 年 9 月 23 日、ソウル(韓国)。

②洪宗郁、解放前後におけるアジア社会論の展開――李清源を中心に、朝鮮史研究会関西部会例会、2008 年 2 月 16 日、大阪。

③洪宗郁、戦時期朝鮮における転向左派の経済論、日本植民地研究会第 15 回全国研究大会、2007 年 7 月 1 日、東京。

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

６．研究組織

(1)研究代表者

洪　宗郁（HONG JONG-WOOK）

同志社大学・言語文化教育研究センター・専任講師

研究者番号：80454487

(2)研究分担者

(3)連携研究者